

---

# 追放されし者

九葉羅斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

追放されし者

### 【Nコード】

N6093W

### 【作者名】

九葉羅斗

### 【あらすじ】

強欲なる者。悪意に彩られし者。負の器。神々にいくつもの蔑称を与えられた男、高橋裕也。

はるか昔の前世で女神を救うために女神の役目を奪った彼は役目を果たせなくなり世界を追放される。

たどりついた異世界で彼は生きていく。

主人公チート、ハーレムものです。初心者なので誤字脱字や話の矛盾などがあるかもしれません。ちょっとした空き時間に読んでください。

## プロローグ1

「私の意見は通りましたでしょうか？」

凜とした女性の声が響く。

「うむ、いいだろう」

重々しい別の声が答える。

女性は、ほっとしたのを顔に出さないよう細心の注意を払いながら言う。

「では今日中に終わらせます」

女性が立ち去ろうとすると、声呼びとめる。

「待て、条件がある」

「何でしょうか？」

「決して感謝をしてはならない」

「……なぜ、仕事を奪われた私が人間ごときに感謝せねばならないのでしょうか」

「分かっているのならいい。我々神が人間に感謝をすることがあつてはならない」

「ええ、もちろんです」

血を吐く思いで答え続けた女性の場を去る。

女神は身をひるがえし、そ

女神の後ろを声が追いかける。

「では、高橋裕也の追放を実行しろ。欲望の女神ユリティナ」

## ブローグ1（後書き）

他に連載しているものがあるのに見切り発車してみました。  
両方とも少しずつ連載していきます。

## プロローグ2

どうも、初めまして。高橋裕也といいます。

ちょっと暇があつたらお聞きしたいことがあるんですが、いいですか？

世界ってこんなに殺意高かつたっけ？

今日は朝からひどかった。

朝飯を食べてる時にインターホンが鳴り出てみると

「私を愛してくれないなら死んで!!」

数回しか会ったことのない女性にナイフを持って突っ込まれたり。

大学に行くために電車を待っていたら、電車が来た瞬間。

「積年の恨み」

と叫んだ会ったことのないおっさんに突き落とされたりされたりした。

俺こんなに一日の内に殺されかけたこと無かつたんだけど、もしかしてこれが普通なのかな？

今までがラッキーだっただけ？

うん、ごめん。実は分かってるんだよそんなことがないってくらい。

ちょっと現実逃避がしたかっただけ。

あ、ちなみに今はどういう状況かって？

トイレの中で頑張ってる間に建物自体が火事になりました（笑）。

火災報知機が壊れていたのか何の音も聞こえなかったんだよね。

トイレの個室から出たらあらびっくり、あたり一面火の海。

もう笑うしかなくね？

ていうかもっと頑張れよ、火災報知機。

火事に活躍しなかったらお前がいる意味ねーだろ。

「仕事のしない二　ト火災報知機めっ！！」

叫けんだせいで、肺の中の酸素が一気に持ってかれた。

意識が遠くなってくる。

このままではだめだと思うも体に力が入らない。

まさか、最後の言葉が二ト火災報知機になるなんて……。

その思いを最後に高橋裕也は日本での生を終えた。



### プロローグ3

「起きなさい」

声をかけられて俺は意識を取り戻した。

目の前には、肉感的な美女がいる。

「はい？」

その美女に見覚えはない。

っていつか俺は火事で二ト火災報知器って叫んで死んだはずじやなかっただろうか？

しかし、今俺は辺り一面真っ白な場所にいる。

「ここは神界。読んで字のごとく神々の住む世界よ」

目の前の美女が俺の疑問に答えてくれた。

この展開だとあれじゃないか。

理不尽な理由で死んだ後に神界。

いわゆる、異世界転生もの。

俺の大好きなネット小説での鉄板な展開が今俺に！

徐々にテンションが上がってくる。しかし次の美女の言葉で俺の思考が止まった。

「個体名高橋裕也。あなたをこの世界から追放します。」

.....

.....

「聞いていますか？ 返事ぐらいしなさい」

俺は我に返り疑問を捲し立てる。

「いやいやいや、世界追放ってなんだよ！ 俺なんかしたか？ 火事で死んだだけじゃん！」

美女は眉をひそめた。

「私は女神ですよ。言葉遣いに気を付けなさい」

えー、いや確かに女神に対する言葉遣いとしては悪かったかも知れないけど、そんなことより俺の疑問に答えてくれよ。

「あなたは遥か昔の前世で神の仕事を奪いました。これだけで十分厳罰の対象となります。」

## プロローグ4（前書き）

次でプロローグは終わりです。

次からは一週間に一度を目安に更新していきたいと思っています。

## プロローグ 4

欲望、怒り、悲しみ、それらの負の感情が生き物の体に収まりきらず、あふれ外に出ると障気になる。

障気が溜まると魔物になる。

故に障気を吸収し、浄化をする神がいた。

その神はまだ幼い少女の神だった。

しかし、少女は幼すぎた。

浄化の能力はまだ弱く、いつしか浄化しきれずその体に溜め込むようになった。

やがて少女神は障気に体の内側から侵され始めた。

障気により、邪神へと変りかけている少女神に気がついた幼なじみである半神半人の少年は彼女のために何かできないかと考えた。

人の血が混ざっているがゆえに神の中で迫害されていた少年に分け隔てなく接してくれた少女のために行動するのは当然の事だった。

少年は自らの弱い神格を変質させ、障気を貯める器となった。

少年はいつか少女が一人で障気を完全に浄化できるように成長するまでの器になった。

全ての神格を使ったため、ただの人間に身を堕としてしまったが少年は満足だった。

大切な少女を救う事ができたのだから。

## プロローグ5

「と、いう経緯いきざつであなたは神の仕事を奪ったのよ」

女神がスクリーンを消しながらこちらに振り返っていう。

神の仕事を奪ったという発言に対して俺が説明を求めたら、何処からともなくスクリーンを出して映画？を上映し始めたのだ。

俺は映画が始まる前に女神から貰ったポップコーンをポリポリ食べながら尋ねる。

「あの少年が俺なのか？」

「そう、正確には生まれ変わりだけだね」

俺は最初にこの空間に来た時こそ驚いていたが、映画が始まった辺りから肩の力が抜けて落ち着いていた。

コーラを一口飲んでから尋ねる。

「あれって仕事を奪ったことになるのか？」

我ながら落ち着きすぎかもしれない。

「どのような形にせよ、神の仕事の一部を人間がやっていた事に問題があるらしいわ」

「……………らしい？ あんたの判断じゃないのか」

「ええ、上司の判断よ。私は反対したんだけどアイツがごり押ししたの」

なかなか神様の社会もめんどくさそうだ。

「何で今頃になって追放するんだよ」

「映画の少女が成長し女神になったことと、あなたの作った器が限界をむかえそうだからよ。」

器の限界という言葉に嫌な予感がする。

「………ちなみに限界を超えたらどうなるんだ？」

女神は気まずそうに目をそらして何も言わない。

「怖っ、何か言ってくれよ」

「だ、大丈夫。異世界にいったら関係無いから。器はあくまでもあなたの世界の障気を貯める物だから、気にしなくて良いのよ。」

冷や汗をかきながら説明する女神に問い詰めるのが怖くなり、少し強引に話を変える。

「そういえば、キャラ最初と違うね？」

少し前から気がついていたが、なぜか違和感がなくて流していた事を言う。

「あー、猫被っていたのよ。神様は威厳を持たなくてはならないって決まりがあるの。ただあんたと話していると懐かしくてついっ・・・・?！」

女神がしまったという顔をしたのを疑問に思いつつ、言う。

「あーやっぱり、映画の少女って」

俺のセリフを女神が慌てて遮る。

「それ以上いわないで、あんたの異世界での生活を補助するために私が飲んだ条件の一つにひっかかるわ」

これ以上ないくらい真剣な顔に思わず頷く。

美人の鬼気迫る表情がこんなに怖いなんて始めて知った。

「ありがとう」

女神はニツコリと笑って礼を言う。

俺を補助するための条件なのに礼を言われて居心地が悪い。

微妙な顔をしている俺に気づかず、あるいは無視して女神は佇まいをただしてこちらをみる。

「これ以上話していると、余計な事を言ってしまいそうね。悪いけど、もう異世界にいてもらうわ。必要な情報はあなたの頭の中に入れておくから。さようなら」



女神がしゃべり終わった瞬間、俺の足下に大きな穴が開き吸い込まれるように落ちていく。

「ごめんなさい、ごめんなさい。さようなら。 イズール」

最後にそんな女神の涙声が聞こえた気がした。

## チート

俺は気が付くと見渡す限りに広がる草原に立っていた。

前の世界では感じた事がないほどの濃い草木の香りが心地いい。

空を見上げると、蒼い空に鳥の集団が飛んでいる。

鳥の鳴き声に混じって水音がどこからか聞こえてくる。、近くに川か泉でもあるのかもしれない。

「すごいっ」

綺麗な景色に思わず声が漏れる。

ひとしきり目の前に広がる大自然に感動した後、妙に自分の視界が低いことに気がつく。

比較対象が近くにないからはつきりとしたことは言えないが150cm前後だろうか？

優に20cmは縮んでいる。

まあ、別に身長にこだわりはないから20cmだろうが30cmだろうが好きに縮めばいいけど、理由がわからないのは少し気持ちが悪い。

流石に、一日ごとに20cm縮められたら数日の内に消滅するしな。

「そういえば、必要な知識は頭の中に入れておくって言っていたな」

女神の言葉を思いだし、頭の中に意識を集中する。

「ぐっ」

一気に大量の知識が流れ込んできたので、慌てて知識の奔流を押し止める。

「痛ってー、知識ありすぎだろ」

すぐに止めたから得られた知識は軽い一般常識と自分の体の事だけだがそれだけでもかなり痛かった。

今後は必要なときにだけ頭の中の知識を得ることにしよう。

っていうか、一般常識の中に世界に存在する全ての言語での読み書き会話が入っているのがおかしいと思う。

女神過保護過ぎだろ！

今は誰も理解できない古代語での読み書き会話って、習得してどうするんだよ！

この分だと、他にも余計な知識がありそうだ。

別の意味で頭が痛くなってきたが先ほど得た知識を頭の中で整理していると、自分が縮んだ理由と面白い知識があった。

とりあえず縮んだ原因は女神らしい。

この世界の人間の外見と比べて違和感がないように俺の外見を変えてくれたらしい。

サービスで女神が思う一番かつこいい外見にしたらしい。

ちなみにこの世界の一般的な外見はヨーロッパ系らしい。

手元に鏡がないから自分の顔は見れないけど、一つ確かな事があるとすると女神がシユタコンということだろう。

ついでに、先ほど見つけた面白い知識の方をためす。

それは魔法。

この世界には魔法が存在するらしい。

とはいっても、今からためす魔法はたいしたものじゃない。

しかし、ゲーム好きな人ならこの魔法が一番嬉しいかもしれない。

その魔法は

「ステータス・オープン」

名前      未設定

称号 追放されし者（効果 運上昇 魔力制御上昇）

異界の女神の加護（効果 ユニークスキル 系統  
魔術作成 取得）

異世界人（効果 ユニークスキル 取得）  
神格を失いしもの（効果 ユニークスキル ？？

？？ 取得）

スキル 系統魔術作成

装飾品創造

？？？？

無手格闘術1

「やった、チートだ！」

## チート（後書き）

主人公の外見は半神半人の少年だったところと同じです。

女神の遠回しな告白でした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6093w/>

---

追放されし者

2011年12月1日13時48分発行